

龍谷大学蔵『無量壽經』の訓点について

——定家仮名遣による訓読点と親鸞の字音点——

佐々木 勇

目次

はじめに

一、書誌の概要

二、訓点の種類

三、訓点の内容

I. A・C墨点について

1 和語の表記 ①ラ・オの仮名遣 ②ラ・オ以外の仮名遣 ③音便

2 漢字音

II. B朱点について

1 声点の形式 2 入声点の機能 3 一音節去声字の上声化の割合 4 舌内入声の表記 5 唇内入声の表記 6 唇内撥音mと

舌内撥音nの表記 7 仮名音注の形式(――反)

四、朱点(字音点)と墨点(訓読点)の系統

I. 朱点(字音点)の祖本

II. 墨点(訓読点)の系統

1 墨点の祖本の成立時期 2 墨点の系統

五、むすび

はじめに

『無量壽經』は、『阿彌陀經』『觀無量壽經』との三部で『浄土三部經』として、奈良時代以来浄土宗諸宗で重視されてきた(「正倉院文書」には、各経が、「讀經」「誦經」の項目のもとに、しばしば記されている)。

この『浄土三部經』の訓読史ならびに音読史、仏書訓読・音読史上への位置づけなどは、資料の公刊が進んでいないこともあって、すべて今後の課題となっている。⁽¹⁾

本稿は、『無量壽經』の一訓点資料を紹介するとともに、その訓点によって知られる点を述べようとするものである。

一、書誌の概要

龍谷大学蔵『無量壽經』上下二卷二冊(021—129—2)は、はやく、藤堂祐範『浄土教版の研究』(昭和五年)に下巻の卷末、『龍谷大学図書館善本目録』(昭和十一年)に上巻巻頭の写真を添えて紹介されている。

上下巻とも、粘葉装で、縦二五、七cm・横一六、〇cmである。渋色の表紙がつけられており、紙数は、上巻四十四、下巻四十六である。全紙、斐紙を使用している。

本文は、鎌倉時代の中期に印行された版本であり、粘葉装の浄土三部經としては、現存最古のものであるとい⁽²⁾う。上下巻とも巻末に次の奥書が墨筆で書かれている。

覚忍禪尼被付属光助法印訖／康安元年(二三六二) 辛十一月十七日

『浄土教版の研究』『龍谷大学図書館善本目録』の解説では、この奥書は常楽臺の初代存覚上人の筆になるものであろうと伝えられており、そのように推測される旨を記している。これは、上下巻とも表紙見返しに、おそらくは奥書と同筆で、「常楽臺 三部四卷内」と記されており、これらの字体が存覚自筆本の字体と類似していることによるのであろう。

常樂臺は、常樂寺の前身で、存覚が暦応元年（一二三八）に洛西大宮に一坊を営んだのはじまる。この書き込みによれば、もとは、『阿弥陀經』『觀無量壽經』とともに『浄土三部經』（三部四卷）として伝わっていたものであろう。

存覚は、親鸞の孫の覚如（本願寺第三代）の長子であり、正應三年（一二九〇）に生まれ、應安六年（一二七三）に入滅している。「覚忍禅尼」は、龍谷大学蔵『彌陀經義集』（021—133—1）の奥書から、正平七年（一二五二）に十八歳であったことがわかる。「光助法印」は、存覚の第四子「光助」（一二三五—一二九二）であらう。⁽³⁾

二、訓点の種類

本資料には、鎌倉時代後期から、室町時代までの各種訓点⁽⁴⁾が加点されている。

A 第一次墨点・訓読点。鎌倉時代後期加点。踊字の起筆位置・片仮名字体からこの頃の加点と判断される。濃く太い片仮名。B 朱点の下になる箇所が見られ、最も早い加点であることが判明する。ただし、訓点の分量は少ない。

B 朱点——声点・仮名音注。南北朝期点。字音点のみである。C の墨点の下に加点された箇所があり、また、C 墨点が本朱点を避けて加点した箇所が見られ、それよりも早い加点であることが知られる。奥書の康安元年（一二三一）と対応するものであろうか。

C 第二次墨点・訓読点。室町時代初期加点。踊字の起筆位置・雁点の位置・片仮名字体からこの頃と判断される。ただし、古体の仮名も見られ、踊字の起筆位置も鎌倉後期頃の実態と一致するものも存するため、移点によるものと判断される。A と比べ、薄く細目の訓点であり、訓読点のほとんどは本点である。

D 角点——仮名音注・仮名訓注。A B C 点を引きずる箇所がみられ、最も後の加点であることが知られる。平仮名・片仮名ともに用いる。仮名字体から室町時代中期の加点かと思われる。

三、訓点の内容⁽⁶⁾

I. A・C 墨点について

A 点と C 点とを分けて述べるべきであるが、A 点の分量が少ないため、かえって煩雑になることを避けて、A 点を C 点と区別しつつ、墨点より知られる点をまとめて述べてみたい。

1 和語の表記

① ヲ・オの仮名遣

龍谷大学蔵『無量壽經』の墨点には、「ヲ」と「オ」とが共に用いられている。まず、語頭に用いられている例は、「ヲ」が十語十五例、「オ」が七語十三例である。具体例は、次掲のごとくである。

(一) 内は、所在行数。A 点の場合は所在の下に A と記す。以下同じ。)

「ヲ」A 点 畢^{ヲハリテ} (上 490 A) 終^{ヲヘ} (上 493 A)

C 点 犯^{ヲカスコト} (上 487) 止^{ヲクトモ} (上 142) 按^{ヲサヘテ} (上 32) 自^ヲ (上 56) 己^{ヲカ} (下 57) 各^{ヲノク} (上 444) 各各^{ヲノクノク} (上 525) 已^{ヲハレハ} (上 476)

518 終^{ヲヘ} (上 488) 追^{ヲフ} (上 496) 及^{ヲヨハサルコト} (上 503) 曼^{ヲヨシテ} (下 188)

「オ」A 点 戢^{オサメテ} (上 303 A) 謂^{オモヘリ} (下 334 A) 以^{オモフテ} (下 366 A) 趣^{オモムキ} (下 342 A)

C 点 発^{オコシテ} (上 140) 慳^{オミ} (上 486) 覆^{オホヘリ} (上 453) 欲^{オホシテナリ} (上 90) 欲^{オモテ} (上 204) 欲^{オモフカ} (上 355) 欲^{オモヘハ} (上 454) 謂^{オモリ} (下

192) 念^{オテ} (上 127)

「ヲ」「オ」ともに、歴史的仮名遣に一致しない語例が目につく。しかし、本資料の中では、同一語は同一の仮名で表記しており、乱れは無い。よって、何らかの規範があつたものと考えられる。当時の、「ヲ」「オ」の仮名遣の規範としては、「定家仮名遣」が存したことが知られている。⁽⁷⁾

そこで、本資料の「ヲ」「オ」の仮名遣が定家仮名遣によるものかどうか検討してみる。その結果は、次表の通りである。

本資料の仮名遣	歴史的仮名遣	語頭音節のアクセント	鎌倉時代のアクセント(上段)の根拠 ⁽⁸⁾
ヲカス	ヲカス	上声	犯ヲカス(上上〇)〈仏下本 一二九〉
ヲク	オク	上声	置オク(上平)〈仏中 九八〉
ヲサフ	オサフ	上声	抑オサフ(上平〇)〈仏下本 七八〉
ヲ(ノツカラ)	オノツカラ	上声	然オノツカラ(上平上濁上上)〈仏下本 五〇〉
ヲ(ノレ)	オノレ	上声	己オノレ(上上平)〈仏下本 一三三〉
ヲノく	オノオノ	上声	各ヲノヲノ(上上平平)〈大慈院本涅槃講式〉
ヲハル	ヲハル	上声	了ヲハル(上上平)〈法下 一四〇〉
ヲフ(終)	ヲフ	上声	求ヲフ(上平)〈僧下 一〇八〉
ヲフ(追)	オフ	上声	逐オフ(上平)〈仏上 五九〉
ヲヨフ	オヨフ	上声	及オヨフ(上上平濁)〈僧中 五二〉

右記の語は、いづれも三巻本『色葉字類抄』の「遠(ヲ)」の部に属している。

本資料の仮名遣	歴史的仮名遣	語頭音節のアクセント	鎌倉時代のアクセント(上段)の根拠
オコス	オコス	平声	発オコス(平平上)〈僧下 一〇七〉
オサム	ヲサム	平声	蔵ヲサム(平平〇)〈僧上 三三三〉
オシム	ヲシム	平声	慳ヲシム(平平上)〈法中 一〇二〉
オホフ	オホフ	平声	覆オホフ(平平平)〈法下 七二〉
オホス	オホス	平声	科オホス(平平上)〈法下 一九〉

オモフ オモムク	オモフ オモムク	平声 平声	思オモフ(平平上) 趣ヲモフ(ム)ク(平平〇平) ハ法中 七一 ハ仏上 六九
-------------	-------------	----------	---

右記の語は、いづれも三巻本『色葉字類抄』の「於(オ)」の部に属している。

右の通り、A点・C点とも鎌倉時代のアクセントで上声のものを「ヲ」で、平声のものを「オ」で表記しており、定家仮名遣に等しい。

次に、ヲ・オを語頭以外に用いた例は、「ヲ」の一語二例のみである(助詞のヲを除く)。

尚ヲ (上153・375)

「尚ナホ」は、観智院本『類聚名義抄』で「尚 ナヲ(平上)〈僧下 九九〉であつて、右のアクセントによる仮名の遣い分けの規範に合っている。⁽⁹⁾

②ヲ・オ以外の仮名遣

本資料の仮名遣は、ヲ・オ以外でも、定家が下官集(東京大学国語研究室蔵本による)で示したものと一致している。

「ヘ」A点 所以ユヘハ (上90 A・491 A・下4 A) 所以者ユヘハイカントナレハ (上96 A)

C点 所以ユヘハ (上48) 不殖スツヘ (上48) 植ヘ (上46・下44)

文献の性格上、下官集と共通の語が少ないが、下官集と歴史的仮名遣とで表記が異なる語については、右のように定家の仮名遣に従っており、定家仮名遣と歴史的仮名遣が等しい語についても、「枝エタ」「超コエム」「前マヘ」「上ヘ」「思ヒ」「通タカヒニ」「用キル」「率キテ」「内イレテ」「トイフハ」など、使用例の全例が統一された表記で終始している。歴史的仮名遣に合わない例は皆無である。

③音便

本資料に見られる動詞の音便には、次のような種類がある。

a ラ行四段連用形語尾が表記されないで、助詞テが続く場合。
了^{サトテ} (上 56 A) 入^{サトテ} (上 66 A)

b ハ行四段連用形語尾が表記されないで、助詞テが続く場合。
欲^{オモテ} (上 204) 遵^{シクカテ} (上 19 A) 成道^{シクマテヨリ} (上 339) 稱^{カナテ} (上 444)

c ハ行四段連用形語尾がフと表記されて、助詞テが続く場合。
以^{オモフテ} (下 366 A) 念^{フテ} (下 57 A)

d マ・バ行四段連用形語尾がンと表記されて、助詞テが続く場合。
樂^{コソシテ} (下 54) 曼^{フソシテ} (下 188)

このうち、a はいわゆる促音便、d はいわゆる撥音便と考えられる。また、a と同じくいわゆる無表記である b も促音便であったと考えるのが穏当であろう。問題は、c のフ表記の解釈である。従来、このフは、ハ行轉呼音によるウ音便の表記であるとする考えがとられることが多かったが、それについての反論もある。⁽¹⁰⁾

本資料の用例に基づいて考えてみる。「オモフ」という同一の語に無表記・フ表記両方が見られた。この両表記が同一の音の異表記であるとみれば、その音は、omote のようなものであったと考えることができる。よって、c も、従来の音便の枠では、促音便とするのがふさわしいかと思われる。

促音便の表記は、鎌倉時代後期には、片仮名文・訓点の世界では、「ツ」表記が一般的になったとされているが、本資料の実態は鎌倉時代初期以前の状態と一致する。⁽¹¹⁾

一方、撥音便の表記は、マ・バ行音から撥音化したものをもンで表記しており、鎌倉時代中期以降の実態と一致する。本資料の和語の撥音表記を動詞以外の語も含めて掲げれば、次の通りである。

m 樂^{フソシテ} (下 54) 曼^{フソシテ} (下 188) 助動詞「ム」をン (多数。ただし、終止形は「ム」の場合もある。)

n 所以者何^{ソベハイカントナレハ} (上96) 云何^{イカニ} (上390) 云何^ン (下74) 何^{ナニ} (下4 A・259 A) 奈^{イカニトス} (下209)

2 漢字音

漢字音注は、C点による仮名音注がわずかに存するだけで、墨点による声点は無い。つぎにその全例を掲げる。

吼^ウ (上36) 懼怖^ウ (上40) 塹^{セン} (上41) 垢汚^{クヌ} (上42) 漏^ロ (上46) 宿^{シュ} (上114) 宿^{シュ} (上175) 奇麗^{キレイ} (上343)

沙^{シャ} (上458) 坐^サ (上486) 温^ン (上513) 寸^{スン} (上517) 辜^コ (下355) 安^{アン} (下421)

以上、A点とC点の違いは認め難く、同一の祖本に基づいて時を異にして移点したものではないかと思われる。

II. B 朱点について

前述のごとく、本点は、漢字音注のみである。声点が全巻に亘って付され、まれに仮名音注が見られる。

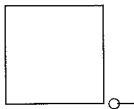
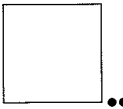
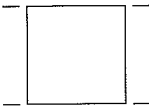
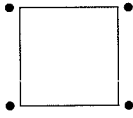
1 声点の形式

本資料には、四種類の声点が使用されている。具体例を示せば左の如くである。

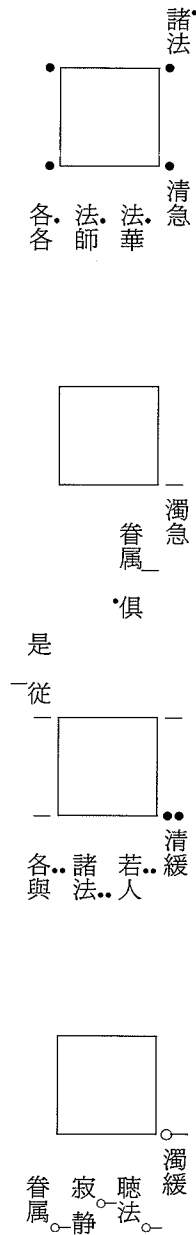
a 佛説無量壽經[・] (上1) b 我^一 (上2) 白光^一 (上17)

c 習[・] (上10) 触[・] (上10) d 雜[○] (上12) 白色[○] (上17)

このうち、[・]と[○]とは入声にしか見られない。声点の形式を整理すると、次の通りである。



右は、非常に希な形式であるが、左の親鸞筆西本願寺本『阿彌陀經・觀無量壽經』所載の点図と同じである（西本願寺本『唯信抄』・専修寺本『浄土高僧和讃』にも同様な点図が親鸞によつて記されている）。



親鸞は、多くの写本に声点を加点しているが、そのなかに、右のような独自のものが存する。この声点は、入声に、「急（キフ）」（未だ開音節化していなかった舌内入声と、入声の促音）と「緩（ユル）」（すでに開音節化していた喉内入声・唇内入声）とを区別するものであることが『教行信証』（東本願寺本）について指摘されている。¹²

この声点の方式について沼本克明は、「この親鸞の方法はその前後の時期に他に同類のものを見出すことが出来ない所から判断して、親鸞一代限りのものであったと考えるべきものであろう。」（注12論文、四頁）と述べている。

2 入声点の機能

ここで、本資料の声点のうち特徴的な入声点の機能を調査してみる。本資料の声点は、字音直読のためのものであるため、入声点加点例が句末かそれ以外か（判定は句切り点による）で分類した。なお、・を清急・一を濁急・●を清緩・○を濁緩とする親鸞の用語を用いる。

a 「急」の声点

ア句末の例（内は延べ数）

舌内入声―清急 25 (35) 濁急 10 (20) 計 35 (55)

龍谷大学蔵『無量壽經』の訓点について

唇内入声―清急 0 濁急 0

喉内入声―清急 1 (1) 濁急 0 1 (1)

イ句末以外の例 (延べ数である。空欄は用例の無いことを示す。以下同じ。)

喉内		唇内		舌内		声点	下接字 の頭音
濁急	清急	濁急	清急	濁急	清急		
9	27	2	4	5	11		カ行
1	2	4	17	8	15		サ
		1			5		タ
	2	3	3	1	4		ハ
				1	6		ガ
				3	9		ザ
				1	5		ダ
				1	4		バ
				5	1		ア
					4		ナ
	1			3	1		マ
					3		ヤ
				1	5		ラ
							ワ

b 「緩」の声点

ア句末の例 (内は延べ数)

舌内入声―清緩 1 (1) 濁緩 0 計 1 (1)

唇内入声―清緩 6 (12) 濁緩 5 (31) 11 (43)

喉内入声―清緩 44 (64) 濁緩 24 (44) 68 (108)

イ句末以外の例

喉内		唇内		舌内		声点 下接字 の頭音
濁緩	清緩	濁緩	清緩	濁緩	清緩	カ行
3	12	2	7			
19	34	2	11		1	サ
5	7	1				タ
5	6	1	2			ハ
8	11	1	2			ガ
3	16	4	6			ザ
2	3		6			ダ
	6		2		1	バ
3	7	1	5		1	ア
4	8	8	4			ナ
6	8	3	3		2	マ
	5					ヤ
3	5	4	2			ラ
1	3	1				ワ

右の通り、「急」は、舌内入声または促音化の可能性が考えられる入声字（無声音が続く場合）に加点され、「緩」は、下接字の頭音にかかわらず唇内・喉内入声字に対して加点されている。⁽¹³⁾これによって、本資料の声点が、親鸞が用いたものと形式・機能とも同一のものであることが判明した。本訓点の加点は、南北朝時代であると見られるが、その声点は、親鸞が鎌倉初期に用いたものと等しいのである。

本資料の朱点（声点・仮名音注）には、他にも親鸞の訓点と類似する点が見られる。以下に挙げてみる。

3 一音節去声字の上声化の割合

⁽¹⁴⁾一音節去声字の上声化は、鎌倉時代に入り顕著となり、字音直読資料では、鎌倉時代中期にはほぼ完了するものである。⁽¹⁴⁾

本資料の一音節去声字の上声化の割合は、左の通りである（直前字の声調の影響を考慮外とするため、調査は句頭の例に限った）。

上巻) 去声——〇四例 上声——八例

下巻) 去声——〇四例 上声——一六例

これを同時代の資料と比較して表にまとめると次のようになる。

聖衆	八一例	四例
親鸞	一〇九例	六例
龍谷	二〇八例	二四例
龍門	五七例	二〇例
東大	七例	三七例
	去 声	上 声

聖衆来迎寺藏『妙法蓮華經』院政末期点

親鸞筆『阿弥陀經・觀無量壽經』建仁く元久(一二〇一く一二〇六)頃点

龍谷大学藏『無量壽經』南北朝期点(本資料)

龍門文庫藏『阿弥陀經・觀無量壽經』鎌倉後期点(祖点は鎌倉初期)

東京大学国語研究室藏『大般若波羅蜜多經』卷一 建長六年(一二五三)頃点

これによって、本資料の上声化の割合が、鎌倉時代極初期の親鸞の加点資料の実態にきわめて近いことが知られる。

4 舌内入声の表記

舌内入声の表記は、鎌倉時代に入ると「ツ」が大勢を占めるが、親鸞は、「チ」を多用している。⁽¹⁶⁾

本点の舌内入声の仮名表記例は、6例のみ(直前の母音は、a・e・o)であるが、全例「チ」で表記されており、親鸞の表記傾向と一致する。

髪^{ハミ}(上30) 截^{セツ・サイ}(下154) 戻^{レ・レイ}(下178) 戻^{レチ・レイ・ライ}(下353) 帥^{スイ・ソチ}(下320) 跌^{テチ}(下345)

5 唇内入声の表記

唇内入声の表記は、鎌倉時代に入ると、前代に用いられていた「フ」の他に「ウ」が多くなるが、親鸞は「フ」を多用している。⁽¹⁶⁾

本点の唇内入声の仮名表記例は、6例のみであるが、全例「フ」で表記されており、親鸞の表記傾向と一致する。

悟^{セフ・シフ・フ} (上40) 戢^シ (上303) 燁^{エフ} (上522) 乏^フ (下355)

6 唇内撥音 m と舌内撥音 n の表記⁽¹⁷⁾

親鸞は、この区別を比較的好くどめている。

龍谷大学蔵『無量壽經』朱点の撥音尾表記の実態は次の通りであり、両者の区別はよく保たれている。⁽¹⁸⁾

a 唇内撥音

ム 沾^{テム} (上389) 僉^{セム・レム・イム} (下89)

ン 陷^{ケム} (上517)

b 舌内撥音

ン 建^{ケン・コン} (上37) 春^{シュン} (上347) 温^{ブン・ウン} (上512) 寸^{シュン} (上517) 煥^{クワン} 爛^{ラン} (上522) 蠕^{ク・セン} (下227) 僣^{エン・コン} (下337) 串^{クワン} (下356)

汗^{カン} (下435)

ム 〈例なし〉

7 仮名音注の形式（――反）

わが国では、中国の影響を受けて、漢字の音を示すために反切が広く用いられた。「――反」の形は、漢字の音を示す注音符法として定着し、ついには万葉仮名で訓を示す場合にも「(万葉仮名) 反」の形が用いられるまでになった。

平安時代には、漢字音を示す場合にも、本来の反切の方法とは異なり、類音字・万葉仮名・片仮名で音を記したのちに反を加えることが行われた。⁽¹⁹⁾ 親鸞も、この(片仮名) 反という形式をよく用いており、本資料にもこの形式による音注が見られる。

しかし、詳しい調査は未だなし得ていないが、鎌倉時代に入ってからこの形式の例は多くないのではなからうか。

親鸞が用いている（片仮名・反という形式が、当時すでに珍しいものになっていたならば、本資料にこの形式がみられることも、親鸞の加點本との類似点の一つとして挙げられよう。

四、朱点（字音点）と墨点（訓読点）の系統

本資料の朱点（字音点）は親鸞の加點資料によく似たものであり、墨点（訓読点）は定家仮名遣によるものであった。ここでは、このような字音点と訓読点の系統について整理しておきたい。

I. 朱点（字音点）の祖本

本資料に親鸞の加點本に酷似した声点・仮名音注が見られる理由について考えるとき、最も自然な考えは、親鸞の加點本を移点したものが本資料であるというものであるう。なぜならば、声点の方式が「親鸞一代限りのもの」と一致するからである。この特殊な声点は、現存の親鸞真跡本のなかでも、前引の『教行信証』『阿彌陀經・觀無量壽經』にしか存しない。親鸞自身も、『教行信証』より後の数々の声点加點資料には使用していない形式であり、他に継承した者がいたとは考え難い。また、本点は仮名音注の表記法にも親鸞独特のものが見られたのであって、親鸞によって声点・句切り点・仮名音注が加點された『無量壽經』が存し、それを移点したものが本資料であると考えられる。²⁰⁾

II. 墨点（訓読点）の系統

1 墨点の祖本の成立時期

朱点の祖本は、親鸞の自筆加點本であると考えられた。しかし、墨点の訓読は、①「也」を不読とすることがある、②「而」をシカモ・シカウシテと読むことがある、③「令」字にシテ：シムの訓が与えられる、④「トイフハ」を用いる、⑤定家仮名遣を用いるなどの点で親鸞の訓読法とは相違する。²¹⁾

そこで、墨点の祖本はいつ頃のどのような系統のものが問題となる。

院政期以降の仏書訓読史の解明が未だ充分になされていない現在、本訓点を時代的に位置づけることは困難であるが、①促音便の表記にツ表記が見られないこと、②定家仮名遣に乱れが無いこと、③定家仮名遣以外の仮名遣は歴史的仮名遣に反する例が無いこと、④鎌倉時代に入ってみられるようになる近代語への過渡期的現象が見られないことなどから、その祖本は、院政末く鎌倉初期のものであったと考えられる。

2 墨点の系統

本点の系統は、定家仮名遣を用いているということと、親鸞の訓点とは別系統であるということ以外、詳しいことはわからない。現状では、これ以上推測の手がかりが無い。同類の資料の発見に努めたい。⁽²²⁾

五、むすび

本稿では、龍谷大学蔵『無量壽經』を国語資料として紹介することを目的として、その訓点の様子を述べてきた。その訓点の国語資料としての価値は、概略、以下の通りである。

1 本資料に見られる朱点は、親鸞の加點本の忠実な移点によるものである。これによって、鎌倉時代初期の吳音研究に好資料が加わった。

2 本資料に見られる墨点は、『無量壽經』の訓読を示している。鎌倉時代における『無量壽經』の訓読の様子を知る上で重要な資料である。

3 本資料の墨点には、定家仮名遣が使用されていた。祖本の素性・移点者などについては現在のところ不明であるが、訓点資料における定家仮名遣の実態を知る資料として貴重である。

はじめにも述べた通り、『浄土三部經』の訓読史・音読史の研究はほとんど行われていない。延べ書き本・仮名書き經・

音義等との関係を含め、すべて今後の課題である。

注

- (1) 字音読資料を紹介したものに、片岡義道「仁和寺本阿彌陀經について」(『慈覺大師研究』(早稲田大学出版部)所収)、佐々木勇「龍門文庫蔵『浄土三部經』について」(『鎌倉時代語研究』第十三輯所収)がある。
- (2) 藤堂祐範『浄土教版の研究』。
- (3) 『真宗史料集成』第七卷(同朋舎)参照。また、本資料の奥書と全く同一・同筆の奥書が、龍谷大学蔵元亨元年(一二三二)版『黒谷上人語燈録』(021—234—7)の各冊に墨書されている。覚忍が光助に付属せられる折に、これも同時に渡されたものである。この『黒谷上人語燈録』は、漢字平仮名交じり文の版本で、漢字には平仮名の振り仮名が墨書されている。
- (4) 小林芳規「踊字の沿革統貌」(『広島大学文学部紀要』第二十七卷一号)。
- (5) 小林芳規「返點の沿革」(『訓点語と訓点資料』第五十四輯)。
- (6) D角点は、時代が降ることもあり、この度は取り上げない。
- (7) 大野晋「仮名遣の起源について」(『国語と国文学』昭和二十五年十二月)。同「藤原定家の仮名遣について」(『国語学』第七十二輯)。
- (8) 「仏・法・僧」は、観智院本『類聚名義抄』の所在である。次表も同じ。また、鎌倉時代のアクセント資料としては、『名義抄』のほかに、『四座講式』(金田一春彦『四座講式の研究』による)・「古今和歌集声点本」(秋永一枝『古今和歌集声点本の研究』による)・浄辨本『拾遺和歌集』(築島裕「浄辨本拾遺和歌集所載のアクセントに就いて」(『国語アクセント論叢』所収)による)・御巫本『日本書紀私記』・鴨脚本『日本書紀』神代巻を用いた。
- (9) 定家も「尚ナホ」は、『御物本更級日記』(定家自筆)・高松宮本『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』(定家本の臨模本)で「なを」と書いている。
- (10) 築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 研究篇』一三五頁。
- (11) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(『広島大学文学部紀要』特輯号3。昭和四十六年)参照。
- (12) 小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」(『東洋大学大学院紀要』第2輯)、沼本克明「漢字音に於ける促音の表示法」(『国文学攷』第六十九号)参照。

(13) 例外となるのは、第一に、喉内入声で句末または有声音が続くにもかかわらず「急」の声点が加点了た例である。①无_去益_{入急} ②得_{入急}聞亦難。兩字とも無声化した発音を、「急」として捉えたものではなからうか。例外の第二は、舌内入声でありながら「緩」の声点が加点了た例である。①蹉_去跌_{入緩} ②七_{入緩}歩_{平濁} ③日_{入緩}世 ④裂_{入緩}魔_去 ⑤鐵_{入緩}困_上 ⑥徹_{入緩}摩。日・七は、親鸞の加点了た資料でも緩の声点加点了が見られる字である。

(14) 佐々木勇「吳音一音節去声字の上声化の過程」(『鎌倉時代語研究』第十輯) 参照。

(15) 吉沢義則「教行信証の訓点は坂東語か」(『龍谷大学論叢』大正十二年四月)、小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」(『東洋大学大学院紀要』第2輯) 参照。

(16) 沼本克明「平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究」(武蔵野書院。一九八二年) 参照。

(17) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」、沼本克明「日本漢字音の歴史」 参照。

(18) 唇内撥音をシで表記したものが一例あるが(陷)、移点の際に当時一般となっていたン表記にひかれたものか、移点者が新たに加えたものであろうか。

(19) 万葉仮名の例は、空海撰「一字頂輪王儀軌音義」・『新撰字鏡』などに見られる。(片仮名) 反は、西大寺本『金光明最勝王經』平安初期点・石山寺本『大方廣佛華嚴經』(八五〇年頃点)・『地藏十輪經』元慶七年(八八三)点・石山寺本『法華經玄贊』(平安中期点)・最明寺本『往生要集』(十一世紀後半頃朱点) などに類例がある。その他の例は、築島裕「平安時代語新論」四一一〜四三二頁の用例を参照。

(20) 本資料の声点を『教行信証』『阿彌陀經・觀無量壽經』の声点と比較すると、平・上・去声の濁音を一貫して一で示している点で、『阿彌陀經・觀無量壽經』の方に近い。『教行信証』(東本願寺本)は、平声・上声・去声にととの両様の声点が見られる点で徹底していない。『阿彌陀經・觀無量壽經』には、そのようなことはない。したがって、本点は、親鸞筆『阿彌陀經・觀無量壽經』の加点了と同時期(親鸞三十二・三歳頃)の親鸞加点了『無量壽經』を移点したものであると考えられる。親鸞加点了『無量壽經』が現存すれば、それとの比較によってこの点が明らかとなるが、遺憾ながらそれは伝わらないらしい。しかし、『浄土三部經』のうち、「弘願門」の教えとして親鸞が最も重視した『無量壽經』にも、他の二經と同様な加点了資料が存したことは十分考えられるであろう。なお、親鸞が『無量壽經』を讀誦したことは確かである(親鸞の妻恵信尼が娘覚信尼に宛てた書簡には、親鸞が寛喜三年に病床で高熱にうなされながら、うわ言に無量壽經を読み続けたことを書き記している)。

また、朱点の移点者は、親鸞の真跡を容易に見ることができた人物ということになる。本資料にまつわる人物の中では、奥書を書いたと伝えられている存覚がこれにあたる。現に、存覚上人が親鸞の加点了本から移点した『阿彌陀經』と『觀無量壽經』

が、高田専修寺（文保元・二年へ一三一七・八）移点と本願寺（正平六年へ一三五二）移点に伝存しており（『親鸞聖人眞蹟集成』第七巻 解説。ただし、その時点で『無量壽經』の親鸞加點資料が存したものか否かは不明である。）、今は、朱点の移点者として存覚を想定しておきたい。ただし、本点が、存覚移点本をさらに移点したものである可能性は否定できない。

(21) 小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』第一章、金子彰「親鸞の仮名づかい」（『国文学』七六号。一九七八年）参照。また、今に伝わる親鸞自筆の『阿彌陀經・觀無量壽經』（西本願寺本）は、朱の字音点のみであつて、本文に直接加えられた訓読点は無い。

(22) 定家仮名遣が漢文訓読の場では、一般に用いられなかったことについては説かれるところである（築島裕『歴史的仮名遣い』へ中公新書）。現在のところ、鎌倉時代の漢文訓読に定家仮名遣を使用しているものは、定家自身の加點と推測されている梅沢本『新撰朗詠集』（小林芳規「梅沢本新撰朗詠集の訓読語について」）「訓点語と訓点資料」第二十六輯（参照）のみである。定家は、晩年、『浄土三部經』の書写・加點を行なっている（天福元年へ一二三三）十一月十二日には、『無量壽經』の書写を始め、同二十九日には加點をしたという記事が『明月記』に見られる。定家自身の加點本が、本資料の祖本であつた可能性も含めて、なお考えたい。